

室井尚×吉岡洋 連続講座

哲学とアートのための

# 12の対話 — 「現代」を問う

イントロダクション

テーマ **①** 「考える」＝「迷子になる」



---

## 第1回 イン트로ダクション・「考える」＝「迷子になる」

---

吉岡 洋 (進行 安藤泰彦)

みなさん、こんにちは。たくさんお集まりいただきありがとうございます。京都芸術センターのこの大広間ではこれまでも何回か話をしたことがあります。うたがいなく、今回がいちばん大規模な集まりになりました。よろしくお祈りします。

安藤さんから今紹介していただいたように、室井尚さんと12回の哲学対話シリーズを今年度1年かけてやる予定になっていて、そのプレ講座は3月12日に銀閣寺道近くの爽庵カフェという場所で行いました。それからすぐに、残念ながら室井さんが亡くなってしまったので、では対話の本番はどうしようということになった。考えた結果、室井さんはやはり予定通りやってほしいと望んでいるような気がしたので、やることにしました。でも4月からというのはいくら何でも急すぎたので、5月から始めることにして、今日がその第1回です。5月から月イチで12回だと1月足りなくなるので、7月にはいっぺんに2回やることにしました。まあ夏の集中講義みたいな感じですね。

12回分のテーマについては、半年くらい前から室井さんと二人で相談して準備していました。だからそれなるべくそのまま活かして行くことにしました。それはいいとして、哲学対話といってもいったいどうやって「対話」するのか？これが問題でした。ぼくは室井さんとは大学院時代からの長い付き合いで、共著で本を出したり翻訳をしたり、その他いろんなプロジェクトと一緒に仕事をしてきました。だからいつも何かを話したり書いたりしていても、相手はどういう反応をするだろうと考えているような面はあります。それでとりあえずは、これまで室井さんが書いたり話してきたことの中から、各回のテーマに関係のありそうな箇所を短くいくつかピックアップして、今お配りしたような形で配布してみようと思います。断片なので、そこから興味を持たれた方はぜひ引用元の本を読んでいただければと思います。今回のイベントではあえて断片化したテキストを読んで、それにぼくが反応するというので、ある種の対話的な雰囲気を作れないか、試してみたいと考えます。

引用文は三つあります。注釈をつけたらどうですかって安藤さんが言うので、それもいいかなと思いましたが、キーワードとか人物名についての解説的な注釈だったら、今はみんな自分のスマホですぐに検索できるので、あんまり面白くない。それで、ぼくの視点からいくつかの語に独自の注釈を付けてみました。これ自体が少し対話的なやり方かもしれませんが、注釈を読むとよけいに分からなくなるかもしれませんが、これこそ今回のテーマに密接に関係したことでもあります。

さて今回のテーマは「考える=迷子になる」というものです。この言い方は元々室井さんの発案になるもので、プレ講座でも彼は、このテーマは自分にとってきわめて重要なものだと言っていました。それではまず最初の引用文を読んでみますが、これは誰か別の人に朗読してもらおうと思います。それで、横浜国立大学時代の室井さんの学生であり、後にはIAMAS(情報科学芸術大学院大学)でぼくの学生でもあった、植田憲司さん(京都経済短期大学准教授)にお願いしたいと思います。別に室井さんの真似して読まなくていいからね(笑)。

### 「迷わない」1990年代以降への苛立ち

……僕はやっぱり、アートはすごかつまらないんだけど、アートだけがつまらないかという、みんなつままないんですよ。思想も90年代は何も面白くない——面白くないって言っていると、じゃあお前はどうかだということになるわけだ。そうすると、何でつままないのかということを考えなくてはいけない。それで、そのつまらなさというのは、……公園の中では自由に遊んでいいよと言われていた子供のような不自由さがあったね、全部フレームが決まっているわけです。左翼でさえ、革命を起こすとか**ブルジョア**を皆殺しにしろとかもはや言わない。今のカルスタ系の人たちが言っているのは、抑圧されたマイノリティの人たちの権利を高めましょうとか、みんなに発言権を与えていきましょうとか言ってるわけですよ。

(藤幡正樹との対談「メディア・メタモルフォーシス」、日本記号学会編『記号学研究』22、2001)

※**ブルジョア** ……現代日本語の「ブルジョア」(または「ブルジョワ」)は漠然と「お金持ち」的なニュアンスを持つ言葉だが、もともとは「有産階級」(または「中流階級」)、つまり特権的な上流階級(貴族など)と労働者階級との中間にある「ブルジョワジー(bourgeoisie, middle class)」という概念があり、ブルジョアとはそれに属する個人のこと。社会主義／共産主義革命の文脈では、労働者を搾取する資本家という意味が強くなり、そこから文中で言われているような、「ブルジョアを皆殺しにせよ」という左翼過激派的な主張が出てくる。

※**カルスタ系** ……「カルスタ」とは「カルチュラル・スタディーズ(cultural studies)」の日本語的な略称。「カルチュラル・スタディーズ」とは20世紀後半のイギリスに発し、マルクス主義の影響を受けながら性的・民族的・人種的・社会的なマイノリティの文化に着目し、「学問的権威」の上から目線ではなく、むしろ対象への共感やコミットメント——研究者自身がマイノリティに属する場合も多い——を持って行われる研究で、支配的文化基準に対する抵抗的意識を持つ。サブカルチャーなど従来は学問の対象とみなされなかった領域に研究活動を拡張した功績は大きい反面、方法論や理論的文脈が多様でタコツボ化・オタク化する傾向があり、科学的正統性という立場からは厳しく批判されてきた(「サイエンス・ウォーズ」など)。「ポリティカル・コレクトネス」を「ポリコレ」と略す場合と同様、「カルスタ」という言い方はやや軽蔑的なニュアンスを伴う。「系」はこの場合は俗語で「(「カルスタ」とハッキリ自称しないけど)漠然とその傾向に属している」という意味。その前に「今の」とあるのは2000年当時「カルスタ系」が現代思想の意匠として流行していたことを示す。(現在では流行ではなくなり、ある程度制度化されている。)

やさしい声の室井さんでした(笑)。読み方はやさしいけど、中身はきついこと言ってますね。これが彼のスタイルです。こんなことまで言っているのかみたいなのを言って、でも必ずしもそれを頑なに主張したいわけではなく、むしろ相手の反応を引き起こしたいのです。私たちの多

くは、なにかを面と向かって「つまらない」と断定しませんよね。学会発表とか聞いても、心の底ではつまらんと思っても「勉強させていただきました」みたいな社交辞令からはじめる人が多い。作品の感想を言う時なんかでもそうです。でも室井さんはいつもハッキリ「つまらない」と言い続けてきたわけです。

そして、なぜつまらないかっていうことを考えなくちゃいけないと言ってますね。みんなつまらないけど自分だけは面白かって言いたいわけじゃない。お前だつてつまらないって言われても仕方がない、ということは認めてるんですけども、ではなぜみんなつまらないのかということを考えてよ。それは、公園の中で遊んでいる子供みたいなものだと言っています。つまり周りの境界が限られていて、安全が保障された中だけで自由に遊びなさいと言われていて、そういう子供に与えられた「自由」のつまらなさだということですね。

では危険な車の行き交う公園の外に出れば自由なのか？ 左翼ですら革命を起こすとかブルジョアを皆殺しにしるとか言わないっていつてるけど、では暴力革命とか殺戮が自由なのか？ それは、ぼくは倒錯した考え方だと思います。護られた境界を逸脱することが自由なんじゃなくて、暴力や殺人すらありうるような範囲で、根本的に世界のあり方を考えることが自由なのです。アートの世界でも同じで、タブーを侵犯することが自由なんじゃなくて、タブーなしに考えてみるのが自由なんです。境界やタブーをひとたび認めてしまうと、思考の範囲はどんどん狭くなっていく。そうではなくて、いくら自由といってもこれだけはアウトでしょ、みたいなことを前提しない。けれども今は多くの場合、最初からそういう境界が決まっていますその中でやっているのが、室井さんの言うつまらなさだと思う。

以前ぼくは神戸の甲南大学というところに勤めていたんですけど、そこに中井久夫さんという有名な精神科医の先生が、神戸大学を退職された後に着任されたのです。ぼくは中井さんの本はたくさん読んで尊敬していたので、同じ職場でお話できる機会ができて非常に幸運だったのですが、ある時こんな話をしたんです。臨床の場面で患者さんが入ってきて「先生、私今人を殺してきました」って言ったらどうするか。その時に医者が「いくら何でも殺人はいかんだらう」と警察に電話してはいけない。そんなことをしてしまったら、精神科の臨床という場が根本から壊れてしまうのです。もちろん、その患者さんほんとに人を殺してきたかどうかわかんないよ。わかんないけれども、たとえ本当だとしても、そこではとにかく「あーそうですか」って話を聞いてあげなければいけない。なぜかという、その人はこの世界の常識的な秩序に適応できないから、精神科医のところに助けを求めてきたわけです。その医者が「殺人はいけない」と警察に連絡したりすれば、医師と患者との信頼関係は絶対に成立しない。外の世界における常識の力が及ばない場所で話を聞いてあげられるから、精神科の臨床というものは成り立つのです。

アートの世界も同じで、それでは殺人もアートなのか？というそんなことではない。ただ、犯罪や反社会的な行為をはじめから排除した安心安全な空間を作ってしまったら、何もかも台無しになるんです。アートというのは常識や法の秩序をカッコに入れた別な世界なのですが、だからといって、アーティストが本当に凶悪犯罪を犯したりすることは滅多にないんですよ。だからほぼ大丈夫なのですが、でも絶対にないとは言えない。滅多にないけどね。そういう意味の安全性であって、客観的に保証された安心安全じゃなく、まず大丈夫というような安全性。これを許容できるかどうか、アートを受け入れられるかどうかということかな。

アートにおける自由の問題というと、いわゆる「表現の自由」みたいなことばかりが、よく問題になります。これも室井さんとこれまで何度も話し合ってきたことなのですが、いわゆる「表現の自由」というのは法的な問題であって、それはそれで大切なのですが、アートには直接関係がない。芸術の外の問題なのです。表現や言論の自由ではなくて、芸術の自由ということを考えて

なきやいけない。

「今のカルスタ系の人たち」っていう言い方もよく分からないと感じる人がいるかと思ったので、注釈で説明しました。それは「カルチュラルスタディーズ」と呼ばれる特定の研究分野の事だけではなくて、室井さんやぼくが関わってきた美学や芸術研究の歴史にも関係しています。それはこういうことなんです。たとえば室井さんやぼくが大学院生だった1980年代初めの京都大学文学部の美学美術史学研究室ではね、本来は美学や芸術分野だからどんな研究対象を選んでも良いはずなんだけれども、たとえばマンガとかアニメとか、サブカルチャーやポップカルチャーで学位論文書くなんで考えられない雰囲気でした。学部で卒業するならまあ笑って合格させてくれましたが、大学院でそんな対象を選んだら研究者として将来がないと言われた。学会発表でもそんなテーマはなかったし、美術館で展示されることもなかった。

そういう暗黙の規範が、1990年代に入ってガタガタと崩れていきました。ある意味での「規制緩和」です。つまり何やってもいい、「何でもアリ (Anything Goes!)」っていうような雰囲気が広がった。これは世界的に進行していたグローバル化の現れの一つです。僕らがそれまでうつろしいなあと思っていた、古臭い人文学的な価値の秩序が崩れていったんですよ。古い秩序の中では「マイノリティ」だった存在が脚光を浴びるようになってきた。問題は、それが本当に芸術の自由を拡大したことになるのかどうか、ということだ。

カルチュラル・スタディーズは世界中に広がって、学問の世界でそれまでまともに扱われなかったマイノリティの独自文化、文学、美術、音楽であるとか、生活様式まで含めたものを学術的に研究することが認められるようになった。もちろんそれまでも、文化人類学や社会学はそうした対象を扱ってきたけど、それはある程度確立された学問の体系があって、偉い学者の先生がそうした文化まで研究してあげるみたいな、上から目線的な側面もあった。それに対してカルチュラル・スタディーズでは、いわば当事者というか、つまり研究者の多くが自分自身マイノリティのメンバーであることが多いのです。その方が有利だからです。黒人の文化を研究するには研究者自身が黒人であった方が、オタク文化を研究するには自分自身がオタクであった方が説得力があるというか、発言する資格が生じるわけですね。そういう世界を、今の私たちは当たり前のように受け入れている。これが1990年代以降の「カルスタ系」の研究世界ですね。問題は、そうなることで私たちは本当に自由になったのか?ということですよ。

抑圧されたマイノリティの人たちに、知的・学問的にも権利や発言権を与えようというのは、たしかに立派なことなんですけれども、それによって決定的に失ってしまったものもある。「何でもアリ」にしてしまうと、コミュニケーションができなくなるのです。研究がオタク的というか、タコソボ的な世界に分断されてしまって、その中ならどんなことやってもいいって言われるのは、一見自由なように見えて、実はまったく自由じゃない。違う領域に属する者同士は、お互いに「面白いですね、勉強になります」なんて褒め合うけど、本当は興味持っていないよね、大抵の場合。互いに安全な距離をとって、相手の領域に乱入したりしない。相手の領分を荒らさないから自分の領分も認めてもらう、というように、いわばバラバラにされるということですよ。

こういうのがグローバル化の現れのひとつだと言ったのは、グローバル化と言うのは英語みたいな世界統一基準を持ってきて画一化される反面、その統一基準の中ではみんながバラバラにされるというプロセスだからです。バラバラにされるとはどういうことかという、それは他の人たちとぶつかったり喧嘩したりしながら、その中から形成されていく認識っていうのが不可能になってしまいますね。自分の領域に外部から踏み込んできた人を、マナー違反として排除するしかなくなる。これが、安全が保証された公園の中で遊ばされている、見せかけの自由ということだと思います。それでは、次の引用文をお願いします。

### 〈考える＝迷う〉ことへの誘惑

……本書の場合この地図〔叢書名「ワードマップ」の「マップを指して言っている〕は読者を無限の迷路にひきずりこむような、奇怪な項目で占められている。そればかりではない。ページをめくれば、そこには一見とりとめもない対話やらSFのような奇妙なフィクションやらが書き込まれているのである。各項目の見出しもキーワードというよりもほとんど見慣れない奇妙な言葉で埋められている。一体これは何なんだ?といぶかったり、あるいは怒りだしてしまう人がいても不思議はない。タイトルに興味を抱いてこの本を買ったのに、有用な情報を与えてくれるどころか、ますます頭が混乱してしまうばかりではないかと思われる方もいらっしゃるかもしれない。

……「情報は宇宙である」。これは、その真偽を「客観的に」決定できるような命題ではない。そうではなく、それは選べられたひとつの「視点」なのだ。ぼくたちは「情報」という概念を、日常言語のなかでそれが閉じ込められていた領域から拡張し、「生命」「意識」「身体」「自然」といった領域へと接合していった。これに対して、情報概念の無責任な濫用という批判を受けるであろうことは当然覚悟の上のことである。だが、問題はそうした視点を採用することによって、これまでとは違った形で世界を捉え直すことが可能になる、ということなのである。

(『情報と生命』序文、1993)

※情報概念 …… 通信理論や情報科学における「情報」の数理的な定義からすれば、室井さんの主張してきた「情報は宇宙である」のような命題は情報という概念の恣意的な拡張として批判されるかもしれないが、1990-2000年代の室井さん（や吉岡）は、それを知りつつあえて世界を情報として理解することの重要性を主張してきた。……ところで最近、かつては奇妙さやパラドクスばかりが強調されてきた量子力学的世界解釈について、パラドクスに見えるのは実在する宇宙との対応という古い観念にとらわれているせいで、宇宙はすべて情報なのだ解釈すればスッキリ理解できるという主張が現れてきた（例えば堀田昌寛『入門 現代の量子力学』KS物理専門書 2021年）のはとても面白いと思う。

室井さんの仕事において最も重要なキーワードは「情報」という概念です。今は誰もが「情報」という言葉を当たり前のように使ってますけど、このテキストが書かれた1990年代の初めには、そうではありませんでした。もちろん「情報」という言葉はあって、誰でも知ってはいましたが、ほとんどの人にとってそれは自分の生きる社会や世界を説明するキーワードっていう感じではなかったと思いますね。「情報」という言葉がこれほど一般の人の間に浸透してたのは、情報テクノロジーそのものの生活への浸透、具体的にはパーソナルコンピュータの普及が決定的な影響を与えたからだだと思います。

室井さんや僕は80年代前半に、大学院で哲学や美学の研究をしていたんですけども、同時に周囲の世界が急激に変化しつつあるのを感じていて、そのひとつが情報テクノロジー、電子的ネットワークっていうものが、まもなく社会に入り込んでくるという実感でした。それまでもコンピュータというものが存在することは誰でも知っていたけれども、それは一部の限られた人たち

しか使っていなかった。つまり大学や企業や軍の施設にいる、研究者であるとか専門的技術者だけです。そもそもコンピューターは非常に高価で、多くの人にとってはサイエンスフィクションの中の存在でした。そうした物語が描く未来社会においては、コンピューターが人間社会を支配するという空想があった。それで人間が幸せになるとかユートピアになるとかもあったけれど、逆にコンピューターが世界を破滅させるというのもあった。

そういうSFの中に出てくるコンピューターはいわゆる超大型のメインフレームなんですね。つまりどこか一定の場所に置かれたマザーコンピューターみたいなものがある、それにどんどん情報を入れていくとだんだん賢くなって、もはや人間にはコントロールできなくなってしまい、コンピューター同士が戦争を引き起こして破局をもたらす、というようなお話もあった。けれども現実には起こったことは何かというと、もちろん大型コンピューターも発達したけど、私たちの生活に最も影響を与えたのは、個人が使う端末が普及して、すべての人がネットワークに繋がられてゆくということが起こったんですね。

1980年代にはまだインターネットは到来していなかったんですが、日本ではパソコン通信というローカルなネットワークの文化があった。これはNECとかニフティサーブといった会社が運営しているもので、室井さんもぼくも一時期それに夢中になっていました。ネットに繋ぐにはまずパソコンを買わなきゃいけないんですけど、その頃のパソコンは高かった。本体、モニタ、プリンタ、モデムなどセットで40万円以上もしたんですね。それをぼくは10年月賦とかで買ったのですが、まだ定職もない大学院とかODの身分です。それをアナログの電話線につないで通信してたんですね。お金はかかるし、周りからは、情報工学の研究者でもないのに前何してんの？という目で見られてました。でもせっかく繋がってるんだから、原稿もこれでやりとりしてみようということになって、共著や共訳の本の原稿を送り合った。でも本当に届いたのか不安だから電話して聞いたりしたんですね(笑)。つまり何が言いたいかっていうと、その頃のネットは全然便利じゃない。別に仕事を効率化してくれないんだけど、それをする事自体が面白かったんですね。

そういうことをしながら、情報という概念はこれから拡張されてゆくだろうという予感を持ってたんです。90年代に入ってもこの『情報と生命』を書いていた頃は、まだインターネットは一般にはほとんど知られていませんでした。アメリカではそういう文化が始まっているらしい、みたいなニュースは時々報じられましたが、一般の人たちにとっては、何それ？みたいな感じでした。インターネットが日本で、まず会社や大学から、そして家庭へと急激に浸透してきたのは1990年代の後半です。

時代的にはそういう状況の中で、この「情報」という概念をいわゆる専門的な通信理論とか情報工学における数理的な定義ではなくて、もっと拡張した意味で、文化や社会そのものの変化をとらえるためのキーワードとして書こうとしたのが、この『情報と生命』という本です。これは共著なんですが、普通共著というのは二人以上の著者が、それぞれ別々の章を担当して書くものですね。でもこの本は、室井さんとぼくのどちらがどの部分を書いたのかということが明示されていない。『アンチ・オイディプス』を書いたドゥルーズ＝ガタリみたいにしたんです。まあこれはちょっとした遊びであるとも言えるけど、同時に僕らが新しい情報環境が生まれつつある世界で感じていた、ある種の実感を反映するものでもあるんです。つまり電子的なネットワーク空間においては、単独の「著者」という観念はもはや成立しないのではないかと、というような。

その後も、共訳の本を出すときにやはりネット経由で互いの原稿をやりとりしました。それで互いに相手の原稿をチェックするのですが、紙だと相手の原稿の上に赤を入れたりして、誰がどの箇所をどう直したかがハッキリ分かります。現代ならワープロで、訂正やコメントの記録を残

してやり取りすることはできますが、その頃はテキストのデータだけでやり取りしているので、相手の原稿を直したらその痕跡は見えなくなるのですね。それで二人で原稿をやり取りしていると、もはやどこがオリジナルで、誰がどこを直したのかが分からなくなってしまいます。本当に著者がマージしてしまうような経験をしたのですが、ぼくたちはそれを面白いと思った。

それで、そういう経験も取り込んで何か新しい本を書きたいと思ったのですね。それが『情報と生命』です。この本の内容は、半分は哲学的エッセイ、半分はフィクションです。こういった学術的な本というのは普通、執筆者を明示しないとか、フィクションを混ぜるとか、ありえないことだよ。でもこれを書いていた僕らにとっては先例があって、1980年代にアメリカをはじめ北米間の哲学の世界で、当時の新しい科学に大きな刺激を受けつつ考えていた哲学者たちがいて、たとえば『ゲーデル、エッシャー、バッハ』を書いたダグラス・ホフスタッターなどがいました。そういうのを読んで、カッコいいなあー、これ!とか思って、自分たちもこういうプレイフルな本を書きたいと思って作ったのですね。そして共著だけど、二人の著者がマージしているような本にしたかった。そんなことを引き受けてくれた新曜社という出版社の、渦岡さんという編集者にはとても感謝しています。

ただ、『情報と生命』は新曜社の「ワードマップ」というシリーズの一つとして出版されたんですが、このワードマップというのはその名の通り、気になる言葉、現代のキーワードというような言葉について、比較的若い研究者たちが短い論考によって解説するというような、そういう企画のシリーズだったんです。例えば社会学だったら、社会学関係でその当時話題になっているような言葉やトピックを集めて解説するとかね。分からない言葉は辞書を引けばいいのだけど、辞書よりは長めのエッセイ、小論文というようなもので、みんなが気になる言葉を解説する、というような、叢書の趣旨だったと思います。

ところが、室井さんとぼくが『情報と生命』でやったのは、そうした趣旨とは真逆のことだったのです。キーワードを選んでくれと言われたので僕らも選びましたが、それについて僕らが書いたことは、多くの人が疑問に思っていた言葉の意味を明確に説明することではなくて、いわばその反対のことだったんです。現代のキーワードについて知りたいと思ってこの本を手にしたのに、中には解説的とは言えないエッセイや訳の分からないSFみたいな話を書いてある。つまり、よく耳にするけどわからない言葉があるから、この本を読めばそれが明快に分かるというようなこととは逆に、この本を読むと今まで臆げに分かっているような気がしていた言葉が、余計に分からなくなる。何となく目的地が見えているように思ってきたのが逆に道に迷ってしまう、というようなテキストを、僕らは目指したんです。

でも、なんでそういうことをするのが、とても大事だと思えたのだろうか？ 人を道に迷わせること、迷子にすること、そして自分自身もいまだに迷子であることを赤裸々に示すことが、どうしてそんなに重要なことなのか。それは今のぼくにとっても謎であり、この哲学対話を通してこれから考えていきなすテーマでもあります。では次の引用をお願いします。

## 真理と説得

[フロイトの説明は] 経験に合致している説明なのではなく容認されてしまう説明なのである。諸君は容認されるような説明を与えなければならない。これこそ、説明ということの全眼目なのである。(ウイトゲンシュタイン)

……「本当はこうなのだ」という説明は、それが何かしら隠されていた真理の「発見」であるとか、世界と正しく〈対応〉しているとかの理由で承認されるのではない。そうではなく、それは単に「説得」の問題なのであって、ちがったやり方をすれば、それはまたちがった形で容認されることがある、とかれ(ウイトゲンシュタイン)は言っているのである。精神分析が治療において何らかの成果をあげるとしても、それはフロイトが神経症の「本当の原因」を発見したからではなく、われわれに容認させる「理由を見つけ、そのことを説得したからにほかならないのだ。

(「説得と争異」『メディアの戦争機械』1988)

※ウイトゲンシュタイン……室井さんや吉岡がこれまで刺激を受け続けてきた哲学者の一人。ところでウイトゲンシュタインも、しばしばその論理的パラドクスばかりが注目されるが、真理ではなく説得というこの主張は、「宇宙は情報である」という立場から見れば別に不思議なことではなく、現実的・合理的でプラグマティックな態度である。

※精神分析……フロイトの精神分析がそうした「説得」を示す例としてここでは取り上げられているが、それはウイトゲンシュタインの活躍した同時代(1920-40年代)に、精神分析が流行すると同時に物議を醸し、常に論争的となっていたからである。精神分析は20世紀の前半から1960年代頃まで、哲学や文学・芸術ばかりではなく、その大衆文化的な影響(マリリン・モンローの映画など)も含めて全世界的に絶大な影響を及ぼした。だが現在では、精神分析は学問的な正統性を疑われて大学からも追放され、影響力も限られている。これはウイトゲンシュタイン的な文脈からすれば進歩ではなく、反対に「説得」から(実在との対応としての)「真理」への退行であり、1990年代以降の現代文化が、せつかく切り開かれた哲学的思考の可能性を封印してしまったことのアラわれである。

これは難しいね。精神分析とかウイトゲンシュタインとか、出てくるしね。『メディアの戦争機械』という本からとったのですが、ウイトゲンシュタインっていうのは20世紀初頭のオーストリアで活躍した哲学者で、哲学の世界ではすごく有名な人なんですけれども、単に哲学の世界だけで論じられているんじゃないで、非常に広範囲に影響を与えてきた人なんです。ウイトゲンシュタインは第一次世界大戦に従軍して、塹壕の中ですごい哲学的着想をするんです。「哲学は終わった」という着想ね。それをまとめて出したのが、『論理哲学論考』というとっても不思議な本です。で、これを読んでみんな、西洋哲学がすべて終わったって思った。いや、みんなが思ったわけではないけど、要するに、哲学がこれまで扱ってきた問題の中で、解決できるものは解決済みで、それ以外はいくら考えても埒のあかない偽問題だから関わり合っても無駄だ、みたいな意識が広まっ

た。ある種、哲学に死刑宣告を突きつけた、みたいな受け取り方をされた面もあり、分析哲学の範囲を越えて文学、批評、芸術、さまざまな分野に影響を及ぼしました。

で、そのワイトゲンシュタインがここではフロイトについて語っているということです。フロイトは聞いたことがある人が多いと思いますが、精神分析の創始者ですね。精神分析はそれが広がった20世紀初頭以来、その説明の信憑性とか科学的正統性について何度も疑問視されてきました。心理学の理論がそんなに話題になるということは、それが一般にすごい影響力を持っていたということの証拠でもあります。

フロイトの説明は経験に合致してる説明なのではなく容認されてしまう説明である、というのはどういう意味か。えーと何が問題なのかと言うとですね、自然科学において「真理」とはそもそも何を意味するのかという問題があるのです。この問題に対するスタンダードな答えは、真理とは実在との一致であるというものです。即ち真理というのは、人間の認識、つまり人間が頭の中で知る何らかの情報内容が、人間の外にある世界そのもの実在世界のあり方と一致しているということです。たとえば私たちがなぜ病気になるかという、それは何らかの病原体が身体に侵入して病気を引き起こすのだという説明が科学です。昔は、病気になるのは悪霊が取り付いたとか、誰かが呪っているからだとかいう説明もありえたけど、科学は病気の原因となる病原体の存在を顕微鏡で示すことができたので、これが実在する世界との対応ということなのです。

それに対して、フロイトの精神分析における真理はそうではない。この話をする前に、そもそも精神分析っていうのは1970年代頃までは世界的にもすごい影響力を持っていたということ、今はまず言っておかなければいけないかな。ここに集まっているいろんな世代の人たちの中には、その雰囲気がおぼろげに実感できる人もいますが、おそらく1980年代以降に生まれた若い人たちはまったく分からないかもしれない。精神分析なんて、昔の心理学の一分野だろうくらいの理解かもしれません。でもそうじゃなかったんですね。精神分析の影響力はものすごく、小説や映画、演劇や美術とかあらゆる分野に波及していました。サルバドール・ダリの絵画がフロイトの『夢解釈』に影響されていたのは分かりやすい例だけど、それだけではなく、たとえばマリリン・モンロー出演の『7年目の浮気』みたいな大衆映画でも、なんかヒゲ生やした精神科医が患者を長椅子に横たわらせて、なんでも思いつくことを言ってくださいみたいなシーンがあって、あれ何やってんの?と思うかもしれないけど、あれがフロイト精神分析学の大衆化されたイメージなんです。

それで、精神分析における真理とは何かという問題に戻ると、精神分析は患者の語る物語を元にして分析を進めますから、もしも患者本人が自分の語る事実について勘違いしていたり、嘘を言っていたりしたらどうなるか、ということです。もしも自然科学だったら、最初にとったデータが間違っていたら、それに基づいて理論を立ててもダメですよ。精神分析の場合、たとえば神経症の患者が幼い頃父親に性的虐待を受けたことが現在の症状の原因であるという理論があっても、後から調べてみるとそんな性的虐待は客観的に存在しなかったって分かるような事例がある。じゃあ、その患者が語った事は嘘だったんだから、それに基づいた分析も理論も意味がなくなるのかと言うと、そうではないんですよ。何故かと言うと、事実ではなくその人がそう信じていることが重要だから。その人がたとえ嘘をついていたとしても、嘘をつかなければならない事情があったわけですからね。事実との一致ではなく、そうした部分が大事なのです。

ここで室井さんが引用しているワイトゲンシュタインが言っているのは、実在する世界との合致ではなく、みんながそれを聞くと「なるほどなあ!」と思って容認するような言説の中に、真理の基準を見るということです。このことは、現代のネット社会に生きている私たちにとって、非常に切実な問題ではないでしょうか。私たちは今、いろんな政治的な問題であるとか、感染症の

問題とかに関して、どのように判断しているのか。テレビを観てもネットを見ても常に不安ですよ。矛盾する意見があった場合に誰が正しいのか、どの考え方が正しいのかを判断する時に、いちいち科学的な「エビデンス」に基づいて判断しているのでしょうか。ほとんどの人はエビデンス、つまり特定の説明が実在する世界と一致していることを、自分で確かめるなんてできないわけですよ。

だから我々が影響を受けたり、自分が信念を持ったりするのは、要するに説得されているだけなんだよね。まさに、このワイトゲンシュタイン的な世界を私たちは生きているわけです。にもかかわらず、我々が「本当は現実はこちらなんだよ」って言う時、その「本当は」は、あたかも実在との一致をどこかで確認できているかのように語っている。室井さんはずっと「宇宙とは情報なんだ」と言ってきたわけですが、その意味は、宇宙とは私たちの知識から独立してどこか別のところに存在してるんじゃないかと、要するに宇宙について私たちが語る時に、その認識をどうやって他の人と共有するか、その部分がいちばん大事なんだということだと思います。

今日はこんなにたくさん集まっていたら本当に嬉しいんですけども、この中には室井さんを直接知っている人や、僕がいろんなところで話したりネット配信したりしたことがきっかけで集まってくれた人もいます。なので、全然違うルートで集まってもらった多様な聴衆の方がいるという感じがあるのですが、私のこれまでの話に対して、後半はどんな角度からでもいいのでツッコミを入れて欲しいですね。質問でも意見でも。ぼくもこれまで日本でも海外でも話をしてきましたが、日本の聴衆はだいたいお利口というか礼儀正しいというか、マトモなことを質問しすぎみたいな印象があるんですね。

海外だと場所によるけど、前提の前提みたいなのにツッコまれて、困るけど面白いみたいなこともある。でも一緒に講演をした外国人の同僚を見るとね、基本的な質問をされればされるほど、優れた人ほど、喜んで答えるんですよ。こんなに何にもわかってない人にどうやったら理解してもらえるかっていうことに、持てる限りの知的エネルギーを投入するわけですね。ぼくはそういうの見てすごいなあと思った。だって普通、基本的な質問されたらもっと勉強してから来なさいみたいな先生も多いから。でもそういうのは、半端な研究者ですね。基本的な問題を軽んじるのは。基本的なことであればあるほど、大事なんですよ。それが本来のあり方だと思う。



イラスト／谷本 研

---

## 参加者との対話

---

吉岡 後半は質疑応答というか、ここに集まっていたいただいた方々との対話ということにしたいと思います。まず休み時間に聞かれたことは、吉岡さんどうしてずっと正座してるんですか？(笑)ということですが、自分でも気がつかなかったけど、実はぼくは正座は何時間でも全然平気なんですよ。今と違って子供の頃から家は畳の生活だったし、京都市立日吉ヶ丘高校の弓道部で鍛えられたから正座はいくらでもできるんですけども、皆さんは別に、先生が正座してるから自分もしなきゃいけないとか、思う必要はないです。

安藤 考える＝迷子になる、迷うことの大切さっていう話で、そう思っている人も多いのではないかと思うんですが、吉岡さん自身は迷ってる？ そうは見えないんですが……。

吉岡 迷ってる。今も迷ってるんですけど、この会もどう喋り方で進行していったらいいか、迷いつつやってるんです。でもそうは見えないとしたら、それはやっぱり年の功で、迷いを見せないテクニックを身につけてしまったのかな。いやらしいなあと思うんですけど。若い時はね、こんなふうに喋っても迷いが丸見えなんですよ。それはまあ可愛いんだけど、もうそういう可愛さはなくなったね。

でも本当は迷ってるというのは、今のこのイベントというのが、ちょっと不思議な催しじゃないですか。「対話」と言いながら結局一人で喋ってて。何日か前に、僕らのことあんまり知らないある人にこのイベントについて説明した時、なるほどそうですか、それもひとつのいい供養のあり方ですよ、と言われて(笑)。そういう意識はなくてこれは追悼的なイベントじゃないっていう考え方だったんだけど、まあ外から見たらそう見えるのか、みたいにも思った。7年くらい前に自分の母が死んだ時も、そういうことをきちっとやる人だったから、最初の一年は毎月お寺さんにお参りしてもらいましたからね。そう見えるんだったらそれでもいいやとも思った。

室井さんが亡くなって今日で50日くらい経つんですけど、20代の頃からよく知っていて、たくさん一緒に仕事もしてきた同僚が亡くなるのはどんな感じかというね、戦争で一緒に戦った親友が死んで自分だけが生き残って帰ってきた、みたいなことがあるじゃないですか。僕の子供の頃はそういう大人が周りにいて「自分だけが生き残った」みたいに言うのですが、子供の時はそれがピンと来なかった。今よく分かるんです、この「生き残る」という言葉の意味が。と同時に「生き残る」っていう日本語の表現はいいなあとも感じた。英語だと「サバイバル (Survival)」なんだろうけど、“survive”っていうのは、生き「残る」んじゃないで、何か困難を乗り越えてさらに生き続けるということで、生きている方に視点があるんですね。生が中心で、その方が大事だという価値観がある。それに大して「生き残る」っていうのは「残る」んだから、去ってしまった方の視点から「お前はもうちょっと残ってなさい」みたいな、つまり死者の方から見られてるっていう意識を含んだ言葉ではないかと思う。あんまりそんなこと意識して喋ってる人いないと思いますけどね。でも、「生き残る」っていう表現は、死ぬことが敗北とかネガティブなことではなくて、死者の視点を先取りして現世を見ている言葉のように感じます。

安藤 後半の方では「真理と説得」についての話になりましたが、なぜ「迷う」「迷子になる」というテーマから、そういう話題になっていったのでしょうか？

吉岡 まず「考える＝迷子になる」っていうのは、室井さんがこの対話の第1回目のために強く提案したテーマだったんです。この「迷子」という表現、自分だったらそんなストレートな言い方はたぶんしないだろうなと思ったけど、なぜ迷うことが大事かっていうことをぼくなりに解釈するとね、たとえばディズニーランドみたいな遊園地だったら、その中で道に迷うことなんて、何の意味もないじゃないですか。境界づけられたテーマパークの中では、個々のアトラクションは入場者に特定の娯楽を与えるためにそこに存在しているわけだから、行きたい所に最短で到達するのがいいに決まってる。

それに対して、私たちが生きているこの世界っていうのは境界がないのです。そして私たちはその中を動き回るための、完全な情報を与えられていないわけですよ。もしかすると今の世界ではそういう実感を持ちにくいかもしれない。だって現実世界の中でもみんなスマホのナビで動きますからね。目的に到達する最短ルートがあるように見える、というか、世界がディズニーランド化している。今や多くの人が朝から晩までスマホを見ているが、このことが私たちの精神活動に与えている影響は甚大です。みんながやってるから事の重大さに気づいていないだけで、もしも30年前の人がタイムトラベルして現代の電車に乗ったら、卒倒すると思うよ。どうなってしまったんだこの世界は？って。

そういう影響の一つですが、私たちはどんなものに対しても「ナビ」があると思ってるんですよ。知らない外国の街に行ったらスマホを見れば迷わないから、そういうパターンの考え方になってしまっている。何にでも最適解がありそれを見つければいいと。すると迷うことは単にネガティブな、時間の無駄でしかない。もちろん仕事で目的地に向かうんならそれでいいかもしれないけども、私たちが世界について考えたり、人生を探りながら進んでいく時はそうじゃない。世界や人生には境界がないし、すべての情報が与えられてないからです。境界も見えず不完全な情報しかない中で、どうやって先に進むか。これは生きてるものすべてが共通に与えられてる課題です。課題を見渡すことができず、リソースも時間も限られている中でどう動くか。

これが迷うという状況なんです、その場合でもやはり何かの指針がないと、分かれ道でどっちに進んだらいいかわからない。その時に全く情報ゼロだと行動できません。それで、何を手がかりにするかという直観なんですね。根拠に基づいた推論ではなくて、何となくこっちの方が面白い、惹かれるという感覚です。この感覚は「おもしろい」よりも関西弁の「おもろい」の方がよく表現しているように思う。こんな能力がなぜあるのかというと、この世界には基本的にナビはないんだから、その代わりに僕らはそういう能力を進化させたんだと思う。でも今はそこらじゅうがナビだから、その能力が閉ざされていると思います。本来は誰でも持っているんだけどね。スマホも地図も持たずに知らない場所を歩いたら、ちよつと思ひ出すかもしれない。

安藤 説得はつまり、その「おもろい」ということなんですか？

吉岡 説得というのは、そういう直観能力に訴える活動ではないかな。「おもろい」から説得されるんです。説得されるというのは、根拠やエビデンスを示されたから理屈として受け入れるということではない。安藤さんの話にぼくが説得される時は、それを面白いと思うから受け入れるんであって……。

安藤 真理だから受け入れるわけじゃないと。

吉岡 言葉では真理だって言うかもしれないよ。「安藤さんの言うことこそ真理だ!」と。でも別

に検証したわけじゃなくて、説得されたということです。

参加者A よく大阪人は何か言った後に「知らんけど」って言うじゃないですか。何か真面目に話をしておいて、最後に「知らんけど」と。逃げてるのかも分かりませんが。それは今の説得という話と関係ありますか。

吉岡 ああ、大阪弁の「知らんけど」。知ってるから言ってるくせにね。たしかに責任逃れなのかもしれないけど、今の世の中なんでも責任追及しすぎだからね。自分の言うことに責任を負わされすぎると何も言えなくなってしまうので、「知らんけど」って最後に付けて、間違ってるかもしれないよ、と。でもね、間違ってるかもしれないことを言うことができない世界って、とんでもないしんどい世界じゃないですか。でも私たちが今生きている世界ってそうですよ。特にSNSのコミュニケーションなんてものすごく抑圧的じゃないですか。Twitterで文末に「知らんけど」って書いても許されない感じでしょ。

参加者B その種の喋り方、つまりなんかその責任を取るような表現を避けて、言い切らないような喋り方って、ある時期から若い人たちの中に入ってきたように思うんですけど、その「知らんけど」ってというのは伝統的なんですか？ 京都の人も言う？

吉岡 わりと伝統的というか、昔からあるような気はします。京都でも言う人は居ると思うけど、イメージとしては大阪人の会話ですね。知らんけど（笑）。

こうした言語の問題も、室井さんとよく議論してきたトピックの一つなんです。言葉は正確に使いましょうと学校では教えるけど、多くの言語観は、言葉をどんどん正確・厳密に使っていくと、それは限界に到達して自己矛盾を引き起こす、そういうもんだと思ってるんですね。その矛盾を起こす所に言語の可能性がある。もちろん実際的には、曖昧な言い方を厳密化することは大事なんだけどね。でも厳密化を極めて行けばそれで世界が支配できると思ったら大間違いで、それこそ「知らんけど」みたいな、この人何が言いたいんだっていうような表現が、単に曖昧なんじゃなくて言語の重要な機能だと思ってますね。科学は建前上、厳密化を目指すんですけど、芸術の言語っていうのは厳密化と曖昧化の両方を使うんです。だからアートには、何が言いたいのかよくわからんものがたくさんあるんです。じゃあわからんものは厳密化すれば分かるようになるのかっていうと、厳密化すると壊れるんです。この、厳密化を徹底すると壊れる情報を担うことが、言語のいちばん重要な働きだと思ってきました。言語は自己矛盾によって先に進むんです。これは、人の話を滅多に面白いと言わない室井さんが、いちばん面白いと言ってきたことなので、これも対話のテーマに入れました。

ここには室井さんのことをあまりよく知らない人もいると思うので、話のついでにちょっと紹介するとですね、彼は人の意見はまず否定します（笑）。ろくに聞く前から「違う!」って言う。それから、長い話をすると寝ます。相手が誰であろうと。たとえば、室井さんはかつて日本記号学会という学会の会長だったんですが、研究大会にゲストを呼んでシンポジウムとかするじゃないですか。そのゲストが話をしている前で、室井さんは会長だから最前列で座っていたのですが、爆睡しました（笑）。それで、ゲストに怒られたことがあるんですね。「会長、寝ないでください」って。すると一応「すみません」って謝るんだけど、ぼくの横に戻って「だってつまらないんだもん」と。

室井さんの理想は、人が話している時には自分は寝ていて、質疑応答の時間になったら、そ

れについて最も的を得たコメントをするということなんです。これは、昔ぼくらが世話になった哲学者の中村雄二郎さんを目指しているんだと言っていました。中村雄二郎さんも、シンポジウムで登壇して人が話している時によくウトウトされていましたね。なのに司会者に当てられると、いちばん面白い批評をする。

まあそういうスタイルの人だったんですが、その室井さんが寝ないで聞いてくれた話のひとつが、ぼくの言語論なんです。つまり言語は自己矛盾をきたして、つまり自分自身が論理的に破綻し不整合になることによって、次のステップに進むっていうことで、そういうダイナミズムが言語自体の中にビルトインされてるっていう見方です。これはこの哲学対話の第8回で、弁証法の話をするときに話します。弁証法、ディアレクティクスというのは古代ギリシャの対話ということもあるんですが、主にはヘーゲルの話ですね。ヘーゲルといっても西洋哲学史の勉強みたいにしてしまうと、それは室井さんがやりたくないって言っていた哲学講座みたいになってしまうから、そういう解説はしません。ヘーゲルの考えた問題が、自分の問題として感じられるような語り方を試みてみます。うまくいくかどうか分からないけど。

そもそもぼくは、過去の歴史や思想を勉強するときに、それが自分の問題と何も関わってなかったら、そんな勉強は要らんとおもうんです。自分と関わりがある、哲学にせよ歴史にせよ大事なわけで、そうじゃなかったらそんなもの勉強する必要ないと思う。だから、学校で習った歴史の授業はつまらなかった、卒業したら全部忘れてしまったっていう人は、そもそも関わりがなかったというだけで、その人がサボってたとか頭悪いとかいうことじゃないと思います。自分に関わりがある事柄は、誰だって身を乗り出して知ろうとしますから。

よく学校の先生仲間では、今どきの学生はこんな歴史も知らん、嘆かわしいと言ったりしがちなんですけどね。最近の若者はこんなことも知らないなんて言ってる人ほど、自分も若い時は知らなかったんだよね。若者が歴史を知らないのは、知らない理由があると思います。それは、過去が自分と関係ないように感じられるからなんです。自分と関係あるような語り方、物語を聞いたら変わるんですよ。

哲学の場合も同じです。昔ヘーゲルっていう人がいてね、弁証法っていう考え方があってね、みたいな紹介されても、自分と関係ないですから何にも残らないし、忘れるんですよ。この哲学対話のシリーズではたしかにいくつか概念とか名前とか出てきますが、それは知っていると知的に見えるアクセサリを身につけるためじゃなくて、そういう概念や名前が出てきてもどびらないようにするためなんです。室井さんも、ちょっとは知ってた方がいいと言っていたのはそういう意味なんです。大切なのは、それらをどうやって自分の問題と結びつけるかということです。

だから、最初からあんまり厳密な定義や中立的な理解から入るのは、失敗すると思うな。間違っていたり誤解があっても、まず何かが引っ掛かることが大事なんです。誤解するというのは、ある意味で繋がっているということですから。間違いや誤解は後で訂正することができますが、何の引っ掛かりもないのは、そもそも自分に関係がなかった、縁がなかったということです。

参加者C 表現の自由よりも芸術の自由が大切なんだと仰ったことを、もう少し詳しく教えてください。

吉岡 表現の自由というのは社会的、法律的な問題であり、そのレベルでは大事な問題だと思いますが、芸術にとって本質的な問題ではないと考えます。芸術は表現の自由を目指しているわけではないし、表現の自由が法的に護られれば、芸術がより自由になるわけではない。数年前に「あいちトリエンナーレ」のことが話題になりましたが、あれはアート表現の持つ政治的メッ

セージを、公共の場で許容するかどうかという問題ですね。実際には許容しても何の問題もない程度のものでしたのですが、現代ではクレーム対応のような問題があり、またアートだから特別扱いが許されるのか、みたいなルサンチマンの反応も絡んできます。それらについて議論することはもちろん意味がありますが、でもそれは芸術にとっての問題ではないのです。

安藤 最初の「公園」の比喻と絡めて言うとういうことになりますか？

吉岡 「芸術の自由」というような言い方をすると、やはり芸術を特権化していると受け取る人がいるかもしれません。芸術だから何してもいいと言うのか、と。この何してもいいのか？ というのはいわば「許可」を求めている問いであって、いわばこの範囲なら自由に遊んでいいよ、という公園の境界を求めているということです。でも、境界が存在しないということが、芸術を考えることの条件なんです。たしかにこれまでの芸術の歴史を見ると、社会的・法的にはかなり危ないというか、いや危ないどころか明らかに反社会的、違法行為となるような振る舞いも存在しています。でもそれは、法や規範を冒すためになされたわけではないのです。そういう「自由」が目的ではない。何というか、表現を追求していった結果、そうなってしまったんですよ。

この辺がね、ぼくもうまく言えなくてちょっと理解してもらいにいくかもしれないんですが。芸術だから感情を傷つけたり法を冒したりしてもいいんですか？ と聞かれたら、もちろんダメなんです。アーティストも一市民ですから。でも、滅多にそんな酷いことにはならないんだけど、時々怪しい領域に踏み込むこともあるんですね。それを目指しているのではないのだけど、結果として。問題は、そういうちょっとグレーな部分もある芸術を許容する社会と、排除する社会とでは、どちらが健全な社会だろうか、ということです。

参加者C それは室井先生が言っている「つまらない」ということと、どう関連しますか？「表現の自由」で護られた範囲の中で遊んでいいということ、境界のない世界で結果的に「やってしまった」みたいなことが起こらないから「つまらない」ということでしょうか。

吉岡 そうのことだと思います。公園の中で自由に遊んでいい、と言われた子供は、たしかに言葉の上では「自由」を与えられているんですが、この「自由」は逆に言えば、公園の外に出てはいけないということを暗黙に命じられているんです。でも子供というのは、その暗黙の制限を踏み越えるもんなんです。大人としては自由を与えてやっているつもりなのに、よりによって「これだけはやめてくれ」みたいな遊びを見つけてしまうんですね。岡本太郎さんが言っていたことだけど、アーティストもだんだん歳取って偉くなっていくと、芸大の先生とか賞の審査員とかになって、若い人たちの作品審査するじゃないですか。そういう時に審査員たちが、これはなかなかよく出来ている、荒削りだけど磨けば光る、みたいに言うような作品はダメだと言うんですね。年長者はそれまでいろんなものを見てきているから、その基準でいいと言われても、それは所詮既存の価値観の範囲内にしかない。そんな風に褒められても喜んではいけないと言う。つまり公園の中で、なかなかいいセン行ってるということですね。それに対して本当に新しいものは、多くの大人が「これだけはやめてくれ」と思うものの中にあると。

参加者C 例えば「表現の不自由展」の中では政治的なこととか日韓関係のこととかが問題になるわけですが、それは抜きにして、宗教をテーマにした現代美術を作る、といったことに関しても同じことが言えるでしょうか？

吉岡 そうですね、今問題になっているアート作品のいわゆる「検閲」というのは、内容が問題じゃないんですよね。内容は見てもそんなに大したことはない。ただ、それを展示することによってクレームとか責任問題とかに発展するのが面倒なので、内容がどうこうではなく、とにかく政治とか宗教とかに関わる作品は遠慮してもらいましょう、ということです。しかも昔みたいに警察が来て展示中止するんじゃないでなくて自粛、自主規制として行われる。

参加者A 宗教と哲学との関係、これは、突き詰めて考えられているのでしょうか。哲学の中には、宗教学というのは入っているのでしょうか。

吉岡 入っています。明治時代に作られた大学の制度としては、哲学の中に宗教学、その何にも仏教学やキリスト教があります。その他には、古代から現代までの西洋哲学や日本哲学、倫理学、そして美学があるんです。美学は哲学のいちばん端っこにあるわけ。

安藤 端っこというのは？(笑)

吉岡 哲学的な美学は研究分野としてはマイナーなので、たいていは芸術学や美術史と一緒になっているということです。

それはともかく、形の上ではそういうことなのですが、今のご質問は宗教と哲学の関係はどうなっているのかという、もう少し本質的なことをお聞きになったのかと思いますので、お答えしてみようと思います。宗教や哲学に関わる問題で普通の人も強い関心を持つのは、神様はいるのか、人間は死んだらどうなるのか、魂は存在するのか、あの世はあるのかといったことですね。ぼくは主として西洋近代哲学を勉強してきたのですが、近代の哲学でも18世紀、19世紀初めころまでは、そういう問題にかなり真正面から答えようとしていたのです。そうしたことは人間には知り得ないとするとしても、なぜ知り得ないのかをちゃんと説明しようとしてきた。宗教の関心と哲学の関心とはかなりオーバーラップしていて、時にはぶつかっていたのです。近代日本でも明治から大正期くらいまでの哲学的著作家たちは、そうした普遍的問題について踏み込んだ、思い切ったというか時には乱暴な議論をしていました。ところが戦後になると、哲学もだんだん専門領域化されていくのです。そうすると、職業として哲学研究をしている先生たちは、死後の世界のようなかわい問題には関わりたくない、と思うようになった。それよりも高度に特殊化された問題に取り組む専門家の方がエライ、というようになった。

そういうふうな哲学が普通の人の抱く宗教的・形而上学的関心から撤退してしまったので、そうした疑問に答えてくれるまともな人がいなくなった。生き死にのことや、人生に意味があるのかといったことは誰しも気になるのに、哲学者が答えてくれなくなった。それで非常に程度の低い、私は亡くなった偉人たちと交信できますとか、寄付すればあなたの運命は改善されるとか言うイカサマ師がのさばるようになる。たしかにそうした問題に答えようとする哲学的な著作家たちもいるのですが、それはアカデミックな世界にいる哲学研究者たちからは相手にされない。そういうことは昔もあったけど、今はその分断が進み過ぎているのではないかと思います。

参加者D その関連で聞いてみたいのですが、陰謀論についてどう思いますか？ エビデンスに基づかない、つまり現実に対応するものではないが、強い説得力を持つ説明というのは、いわゆる陰謀論が利用している話法と同じではないでしょうか。

吉岡 いい質問ですね(笑)。講演者はよく「いい質問ですね」と言うけど、あれは多くの場合、いい質問だと思ってるのではなくて、その間に何言おうか考えてるんですね。

「陰謀論」と聞くと、今の世の中ではドキッとするでしょ。「それは陰謀論だ!」「陰謀論に陥ってはいけない!」と、陰謀論というだけでそれを拒否する人が多いのですが、ぼくは実は陰謀論、大好きなんです(笑)。それは、こういうことなんです。人間は誰しも、世界がなぜこうなっているのかという理由について、筋の通った物語として理解したいという欲求を持っているのです。でも世界は複雑すぎるので、それをいわゆる科学的エビデンスに基づいて誰も反論できないような仕方、つまり説得ということを全く排除して理解するように要求しても、ほとんどの人はそんなことできないわけです。専門家でもできない。だから説得的な物語、陰謀論に惹かれるのは当然であり、人間の本性だと思います。

「陰謀論」という言葉自体がよくないと思うけど、あえて使いながら言うと、陰謀論にも色々あるとぼくは思ってるんです。どうしてもなくレベルの低い、人の不安につけ込んで荒唐無稽な話を信じさせようとするものもあれば、かなりよく出来ている、説明力のある物語もあります。人間は陰謀論から逃れることはできないのだから、より質の高い、普遍的な説明力を持つ陰謀論を見分ける必要があると思う。そのためにはいろんな陰謀論を知って、陰謀論に対しても免疫をつける必要がある。その訓練が「迷う」ということではないでしょうか。

そうした訓練をするには、ネットだけでは難しいと思う。ネットの議論は短いテキストだけのやり取りですから、そんなものでは物語の免疫を鍛えるには効率が悪いです。それよりも、今のこうした状況、つまり対面的なコミュニケーションの方がはるかに情報量が多く、より信頼のおける物語に到達しやすいと思います。

参加者D みんなで迷い方を勉強していこう、というような感じですか。

吉岡 クソ真面目な言い方をすればそうだけど、「迷い方を勉強する」ってなんか語義矛盾みたいだね。

参加者E 迷うことと冒険の違いというか、室井さんがプレトークの中で、「迷う」ことは大切だけど、迷いすぎても困るというか、これ以上行くと崖から落ちるから危ない、ということもあってましたが、冒険もここまで来たらちよっと控えた方がいいとか、そういう基準みたいなものがあるのでしょうか。

吉岡 うん、そういうことだと思いますよ。今の私たちから失われているのは、バランス感覚だと思うんです。つまり、ひたすら迷っていればいいのか、というとそうじゃないんですよ。危ない時もあるわけですよね。だから、どこまで迷いに身を任せて、ある程度進んだらそこで控えたほうがいいっていう見極めをつける必要があると思う。ではどういう基準でやるんですかって言われると、わかんない。経験則だから。大体こんな感じですよって言っても、じゃあそれで絶対大丈夫かという、絶対とは言えない。ある程度経験を積んでも、やっぱり危険な迷い方をする人が出てくる。でもそれ、しょうがないんだよ。

危険があるからといって責任追及するとね、全部ダメになっちゃう。今の世界って何事もそうでしょ。絶対安心安全でなくてはならなくて、一人でも犠牲者が出たら、もうその活動が全部禁止される。全体としての損失を考えたらね、もちろん全てが無駄になる方が大きな損失なんですよ……なんてことを言うと、じゃあ犠牲になった一人の事はどうなるんだ、犠牲はしょうがないっ

て言うのか?と詰め寄られる。もちろん、しょうがない。犠牲はしょうがないと思ってるわけではなくて、そうならないようにみんなで努力しなきゃいけないんだけど、すべてを禁止したら、そうならないように努力することすらできなくなっちゃう。

さっきの宗教と哲学についての話もそうですけど、哲学それ自体、絶対安全かという、もちろん危険な面もあるんですよ。実際、ぼくが京都大学文学部哲学科に入った時ね、うちのおばあちゃんに「そんなとこ入って自殺なんかしんといてや」って言われた。昔はそういう連想があったんです。いや、実際に死んだ人もいるからね。つまりものを考えるって言うだけでも、本当の意味で考えるということは迷子になることだから、危険はある。迷いすぎてにっちもさっちもいなくなって自死するというようなこともあり得ます。では、だからといって哲学を禁止しますか?ということです。

こういう話はなかなか難しいんです。たとえば安心安全を追求しすぎてかえって文化が台無しになっている、というような意見を言うと、ではそうならない新しい仕組みを提案してください、と言われる。でも、そういうことじゃないんですよ。たとえば会議、何かの委員会とかで、危険はあるけどこの活動は大事だから残しましょう、というようなことは提案しにくい。なぜかという、危険の可能性を容認するというのは、暗黙のことだから。この世界にはいろんな危険があつて、下手したら死ぬこともあるのだけど、しかだからといって禁止すると全てが台無しになるから、まあ黙認しましょうというのは、暗黙の了解としてのみ可能なことなんです。企画書として書いた瞬間におかしくなる。まあ企画書も出さないといけないんだけどね、企画書なんかではカバーできない重要性があるということ、みんなが共通認識として持っていなければいけないと思います。

質問者F 話が戻るんですけど、さっき大学の先生の中には「お前そんなことも知らないのか」と言う人がいる話がありましたが、でもそんなことを学生に言う先生はたいした人じゃないと吉岡さんはおっしゃっていて、同じ大学教授なのにこの違いは何なんやろうと思っていて……なんなんですか? (笑)

吉岡 どちらかというと昔の方が、ハッキリ口に出して言う人が多かったですね。今は、あんまり面と向かって学生に「バカかお前」みたいなことを言うとアカハラだからね。どんなにバカなレポートが出てきても、うんまあそういう考え方もあるかもしれけど……とお茶を濁す。一概に先生を非難できないよね。だって思ったことを口に出したら懲戒処分になるかもしれないから。でも、学生の出してきたものを見てバカかと言っても、別に「バカ」という言葉が悪いわけじゃないんですよ。最低限の信頼関係が確立されてないことが問題なんです。なぜ信頼関係が確立されてないかという、接する時間が絶望的に短かすぎるんですね。今の学生って、授業が終わったら即帰ります。まあ昔だつてつまらない授業は即帰ったけど、ちょっとでも何か引つ掛かった時は先生に質問して、そのやりとりが延々と続いて、その後喫茶店に行ったり飲みに行ったりするようなこともありえた。そういう余裕があつたんですね。そんなふうにお茶飲んだりお酒飲んで話した先生から、たえお前バカかって言われても、それはアカハラでも何でもありませんよ。

今は学生とのつながりがすごく薄くて、授業だけでしょ。そんなのほとんどネットと一緒に、先生が何か言っても、それはTwitterで言われたのと一緒なんですよ。極めて限られたコミュニケーションの範囲で、文脈がないから、そこできついと言われると、その言葉自体がすごい攻撃力を持つし、だから言った人をハラスメントとして追求することも可能になる。しんどい時代に私たちはみんな生きていると思うけど、でもこれは、さっきの委員会の話と一緒にね、今の状況は良くないから、もっと先生は学生と飲みにいきましょうって、これは提案できないよ (笑)。つ

まりこれは暗黙の了解で、みんながそういう心の余裕を共有することによってしか、可能にならない。規則で決めることじゃないんだ。

参加者F　そういう心の余裕が持てたらいいなと思います。

参加者G　「共感する」ということ以外の繋がりって、あるのでしょうか？

吉岡　あります。それこそ僕と室井さんのつながりって、そもそも「共感」から始まってないというか、最初からお互いに意気投合して友達になったのではないのです。知り合ったきっかけは、僕が京大文学部大学院の美学研究室に入った時、彼は学年は三年上の先輩だったのですが、ぼくが最初に研究発表したときは、こんな大嫌いと思ったんだって。こういうやつはただちよつと語学ができて勉強好きだけで、自分とは何の接点もない、こういうやつが大学にいるからダメなんだって思ったそうです。それがあつ時、彼が市バスに乗ったらぼくがいて、あー嫌なやつに会つたなつと思ったけど、まあ同じ研究室の後輩だから一応挨拶ぐらいつてやろうと思つて、何でもなつ話をしてるうちに彼が突然「お前、今どきカント哲学みたいなもんやつて、どこが面白いんだよ!？」つてキレた。それでぼくが何か答えたらしいんだけど、実はぼくは憶えてないんです。でも室井さんはぼくの答えを聞いて、こいつは面白いなつと思つたつと言う。その時ぼくは何を答えたの?と聞いたことあるんだけど、内容は憶えてないけど、こいつは面白いこと言うなつて感覚をつつた、と。

つまり何が言いたいかつて言うとなつ、つまりその「いいね」を押すとか、そういうのつて単に表層的な共感じゃないですか。「いいね」押したら終わりだからね。誰の何に押したかもすぐ忘れてしまつてしよ。それに対して、私たちがあつ人と長い間関係を持つ時には、「共感」が最初に来るんじゃないかと、最初は「なんてイヤなやつだらう!」つて思つことも大事なんですよ。好きとか嫌いとかはどつちでも良くて、その反対は単に興味がなつということですね。好きでなくてもいい。「嫌い」つて思つということは、要するに関心があつということですね。本当に関心のない人だつたらすぐ忘れちゃうんはずなんだよ。「嫌い」つていうのは、実はもうちよつと知りたつと思つているのです。

で、そういう「嫌い」から始まつて、関係が何年も続つていくと、だんだん理解し合つて一致していくのかつていうと、それは違つますね。今日、ぼくが喋つてきたことを、もしも室井さんが聞いていたら、たぶん100%否定するでしよね。それぐらいつ最後まで不一致が続つていました。それはこれからも続つと思つけど。だから友達にしろ何にしろ、要するに、その人に共感するとか意見や好みがあつ一致するつといったことはあんまり重要ではなくて、むしろ不一致の部分を保ちなつながら、なおかつ関係が切れない、長く続つていくつというあり方を確立することが、大事なのだつと思つます。本日はあつりかとうござりました。またお会いしましよ。

2023年5月13日(土)　於:京都芸術センター「大広間」